

第二十課

父が栄光をお受けになるためです

祈りの主目標

「わたしが父のもとに行くからです。またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」

(ヨハネ一四・一二、一三)

「父が子によって栄光をお受けになるためです。」この目標に向かって、栄光の御座におられるイエスは、御名によって私たちが求めるものをかなえてくださいます。あらゆる祈りの答は、これを目標としているものです。この目標が達せられそうもない時、御父はお答えになりません。イエスの場合と同じように、私たちの場合にも、これは、私たちの願いにおいて欠くことのできない要素です。御父の栄光こそが、私たちの祈りの目的であり、目標であり、たましいであり、いのちでなければなりません。

イエスは、地上におられた時そうなさいました。「わたしはわたしの栄誉を求めません。わた

しが求めるのは、わたしをお遣わしになった方の栄誉です。」このことばの中に、イエスの生涯のかぎを見ます。イエスの大祭司としての祈りはこうでした。「父よ。あなたの子があなたの栄光を現わすために、子の栄光を現わしてください。わたしは、地上であなたの栄光を現わしました。みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。」以前御父のそばで持っていた栄光のもとに引き上げられるように求めた根拠は二つあります。イエスは、すでに地上で御父の栄光を現したことで、もう一つ、御父の栄光を天において現すことです。イエスが求めておいでになることは、もっと御父の栄光を現すことができるようになることでした。この点において、私たちがイエスと同じ思いとなり、御父の栄光を現すことを、私たちの祈りの主目標にすることによって主をお喜ばせするならば、私たちの祈りは、間違いなく答えられます。イエスは、私たちが求めるものをおこなえてくださいます。愛する御子は、これによって御父の栄光が現れると、はつきりと言われたのです。ですから、イエスは、この目標を確保する機会を決して見すごしにされませんでした。イエスの目標を私たちの目標としましょう。御父の栄光を私たちの求めと御父の答とを結び環にしましょう。このような祈りこそ、答えられる祈りです。^{註1}

このイエスのみことばは、真に両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊の分れ目を刺し通し、心のいろいろな考えやばかりごとを判別します。イエスは、地上での祈りにおいても、天におけるとりなしの祈りにおいても、私たちの祈りに答えてくださるという約束の中でも、御父の栄光を第

一の目標にしておいでになります。私たちの場合もそうなっているでしょうか。それとも、私たちを祈りに駆り立てている一番の動機は、自分の利益や自分の思いでしょうか。もしそうでないにしても、御父の栄光をはっきり意識的に求めることが、私たちの祈りを生き生きとしたものにすることを認識しているでしょうか。当然そう認識すべきです。

時には、神の栄光を求めないこともあるという程度のことではありません。自分がほとんど神の栄光を現していないことを嘆くべきなのです。日常の生活における気持と、祈りの時における気持とがあまりにもかけ離れてしまっています。御父の栄光を求めることは、祈りの時にあわて付け加えるようなものでないことが、ようやく分ってきたところです。全生活、そのあらゆる部分が神の栄光のためにささげられる時に、本当に神の栄光を求めて祈ることができます。「すべて神の栄光のためにささげなさい。」「すべて神の栄光のために求めなさい。」この二つの命令は切り離すことができません。前者に従うことが後者の恵みの秘訣です。神の栄光のためにささげられた生活こそ、イエスが祈りにお答えになる条件です。「父が栄光をお受けになるためです。」

力ある祈りと結びついたこの要求、すなわち、神の栄光を求めることは、ごくあたりまえのことです。主ほど栄光に満ちた方はおられません。主の栄光ほどの栄光はありません。神が被造物にお与えになったのも神の栄光です。被造物は神の栄光を現すために存在します。神の栄光にならないものは、すべて罪であり、闇であり、死であります。神に栄光を帰することによって初め

て、被造物は栄光を見出します。人の子がなさったこと、すなわち、神の栄光のために全く御自身と御自身の生涯をささげられたことこそ、すべて贖われた者のなすべき当然の義務です。それによって、キリストのお受けになった報いが自分のものになります。イエスは、御父の栄光のために完全に御自身をおささげになったので、御父はイエスに栄光と誉れの冠をかぶらせ、御国を御手にゆだねられ、みどころにかなうものを求める力と、とりなし手として私たちの祈りを聞く力とをお与えになりました。この点、私たちがキリストと一つになり、私たちの祈りが、神の栄光に全くささげ切ったものになる時、救い主は、「あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう」という約束を成就して、御父の栄光を現してください。

神の栄光を自分の唯一の目標とする生活は、自分の努力によって達成できるものではありません。そのような生活は、人なるイエス・キリストのうちにのみ見られるものです。そして、キリストのうちに見出されるその生活は、私たちのためでもあります。そうです。神に祝福あれ！キリストのいのちが私たちのいのちだからです。キリストは私たちのために御自身をおささげになりました。キリスト御自身が、今私たちのいのちなのです。神の地位を侵害する自己、利己主義、自信過剰などを発見し、告白し、否定することは当然のことですが、それを自分の力ですることはできません。それは、この地にあって御父の栄光を現し、今御父とともに栄光を受けておられる主イエスが、私たちの心に来て住み、臨在し、支配されて、私たちのうちに御父の栄光を

現してくださることによって初めて可能になります。私たちの自負心を追い出し、神に栄光を帰すために、御自身のいのちの御霊を与えてくださるイエス御自身がおいでになって初めてできることです。イエスは、私たちの祈りをお聞きくださることによって御父に栄光を帰したいと願っておられます。また、私たちに神の栄光のために生き、祈ることを教えてくださいます。

鈍い心を励まして、主がこのことを私たちのうちに成し遂げてくださるように求める動機や力は、どこにあるのでしょうか。何よりも御父がいかに栄光に富んだお方であるか、御父だけが栄光をお受けになるのにふさわしいお方であるかを知ることが必要です。私たちの信仰が、御父の御前に頭を垂れ、神をあがめて礼拝し、御父にのみ、御国と御力と御栄光を帰し、絶えず恵み深く、絶えず愛してく下さるお方としての御父の光のうちに住むことを学ぶことができますように。そうする時、必ず心が燃やされて、「御父にのみ栄光を」と言うようになるでしょう。更に、神の栄光以外はすべて見ることも求めることもしないという生活を求めて、私たちはこれまでとは違った熱心さでイエスを見上げるでしょう。祈りが答えられなければ、御父は栄光をお受けになれません。祈りが答えられるためには、神の栄光を求めて生活し、祈ることが義務とならなければなりません。神の栄光のために、よく祈ることを学びましょう。

子供や友人や仕事や仲間のために熱心な祈りがささげられますが、そこでは神の栄光を求めるより、自分の喜びとか楽しみの意識の方がはるかに強いとあつては、何とも寂しいことではあり

ませんか。聞かれない祈りが多くあったとしても不思議ではありません。理由はここにありません。神の栄光が私たちの目標になっていない時には、神は栄光を受けられません。信仰の祈りをしたいと思っている者は、あらゆることで、御父が栄光を受けられるように、文字通り自分をささげて生きなければなりません。それがなければ、信仰の祈りはありません。「互いの榮譽は受けても、唯一の神からの榮譽を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか」とイエスは言われました。人からの榮譽だけを求める人には、信仰は成立しません。自分の榮譽を放棄し、神の栄光だけを求め、霊的感受性、すなわち信仰を目覚めさせるものは、深い厳しい自己犠牲だけです。神の栄光を求めて神に自分をささげること、神が私たちの祈りを聞いて栄光を現してくださることを期待することとはつながるものです。神の栄光を求める者は、祈りが答えられることによって、その栄光を見ます。そのような者だけが見ると言ってよいでしょう。

もう一度尋ねてみましょう。私たちは、どうしたらそのようになれるのでしょうか。告白から始めましょう。神の栄光に自分の気持を集中させることがなんと少なかったことでしょうか。私たちの生活や祈りが神の栄光に満たされることが、なんと少なかったことでしょうか。御子のように生活し、御子と同じ思いになって、神と神の栄光だけを求めて生きることが、なんと少なかったことでしょうか。時間を取って、聖霊にそれを明らかにしていただきましょう。本当に罪を知り、それを告白することが、救いに至る確かな道です。

それから、イエスを見上げましょう。私たちは、イエスを見ると、死によって神の栄光を現すことができることを知ります。イエスは、死によって、御父とともに栄光をお受けになりました。私たちは死んで、すなわち自己に死んで、神に生きることによって、神に栄光を帰することができます。そして、この自己に死に、神に生きることこそ、イエスが、求める者のうちに与え、また生かしてくださるものなのです。キリストのように、ただ御父の栄光だけを願い、求めましょう。私たちのうちに働くキリストのいのちと力を受け入れることを毎日の生活の心構えとしましょう。また、キリストがうちに住んでくださるので、私たちは神の栄光のために生きることができるといふ喜びにあふれた確信をもって毎日をすごしましょう。私たちがこのように生きることをイエスは保証してくださいます。聖霊はすでに与えられています。私たちが望みさえすれば、聖霊はそのような生き方を経験させてくださいます。不信仰によってちゅうちよするのではなく、確信をもって、すべては神の栄光のために合言葉にしましょう。御父は志を受け入れ、犠牲を喜んでくださいます。聖霊は、私たちが神と神の栄光のために生きていることを、私たちの良心とともにあかししてくださいます。

それによって、なんとという平安と力が私たちの祈りに与えられることでしょう。それは、私たちが、自分自身を知り、私たちが求めたものを恵みによってかなえてくださると約束され、「父が子によって栄光をお受けになるためです」と言われたお方と、完全に一つになれたからです。

みことばと聖霊の働きに、進んで自分の全存在をゆだねた時、私たちの願いはもはや自分のものではなく、キリストの願いとなり、その願いの目標は神の栄光となります。自由も徐々に拡大されて、祈りの中で言うことができるようになります。「御父よ。あなたは御存知です。私たちは、ただ神の栄光のために求めます。」祈りが聞かれる条件は、私たちが登ることのできない山のようなものではありません。むしろ、私たちの祈りは聞かれるという、より大きな確信を与えてくれるものです。祈りは、御父に栄光を帰するという、最も美しく、最も祝福されたものを学んだからです。祈りの特権の尊さは倍になります。それは、次のように、私たちを、愛する御子と完全に一体として、すばらしい主のパートナーとしてくださるからです。「あなたが求め、わたくしがかなえましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」

恵み深い主イエスよ。もう一度みもとにまいりました。あなたが教えてくださる一つ一つの学課は、正しい祈り方をいかに知らないかを痛いほど知らせます。しかし、一つ一つの学課はまた、祈りがどうあるべきかを教えてくださるだけでなく、実際に祈るべきことをも教えてくださるのだという希望をも与えてくださいます。主よ。偉大なとりなし手であるあなたを見上げます。あなたは祈ってくださいましたし、祈りを聞いてくださいます。そして、御父が栄光をお受けにな

るために、私を教えて、神の栄光を求めて生き、祈る者としてくださいます。

救い主よ！ この目標に向かって、私は自らをおさげします。私は何もしません。私は、すでに、あなたとともに十字架につけられ、死に渡された者として自己を捨てました。御霊によって、自己の働きは制せられ、死にました。あなたのいのちと御父の愛が、私をとりこにしています。毎日、毎時、また祈りのたびに、御父の栄光が私のすべてであるようにという新しい願いが、私のたましいを満たし始めています。ああ、主よ。私はあなたの学校に入ってこのことを学ぼうとしています。私を教えてください。

栄光の神、栄光の父、私の神、私の父よ。あなたの栄光こそ生きがいであることを知ったあなたの子の願いを受け入れてください。ああ、主よ。あなたの栄光を現してください。あなたの栄光で私をおおってください。あなたの栄光で、私の心の宮を満たしてください。キリストのうちに現されたあなたの栄光のうちに住まわせてください。みこころのままに、あなた御自身で私を満たしてください。あなたの子が、御父の栄光を求めることが自分の榮譽であることを知るために。アーメン。

注1

巻末付録のジョージ・ミューラーの伝記を見て、ミューラーがどのようにして、神の栄光を第一とするように導かれたかを考えなさい。